

これらの本は、図書館の特設コーナーに並んでいるよ！



H26夏休み 教員推薦図書

ドストエフスキー著 原卓也訳「カラマーゾフの兄弟 上中下」（新潮文庫 各907円）
20歳までには読んでおきたい本です。 M科 藤井敬士先生

ヘミングウェイ著「老人と海」（ペンギンブックスなど）
17歳の夏、読み始めました。簡潔な美しい英文で綴られています。「老人はライオンの夢を見ていた」・・・この文章までたどり着いてください。 M科 藤井敬士先生

夏目漱石著「こころ」（集英社文庫 432円）
鎌倉の材木座ビーチで大学生である「私」は、「先生」（無職）と出会い交流が始まる。ある書評では、漱石作品の中で「こころ」はアンバランスであるといわれる。人のエゴイズム、コミュニケーション不全からの孤独な人間関係を「先生」と「私」を通して描かれている。過剰な自意識によって近代に生きる自己の歪みを知りながら、それを乗り越える難しさ。「こころ」が執筆されて100年を経て、携帯電話もtwitterも繋がる道具は増えたけれど、人のこころはどう変化しているのだろうか、とふと思う。作家の死後50年を経ると著作権フリーとなる。私はipadにダウンロード、今は漱石先生が猫に語らせる日本語に目を澄ませている。 A科 永峰麻衣子先生

三島由紀夫著「春の雪」（新潮文庫 723円）
「今、夢を見ていた。また、会うぜ。きっと会う。滝の下で」— 夢という縦糸によって紡がれる輪廻転生の物語「豊穡の海」四部作の第一作目。読み進むにつれて、ひとつひとつの人生に与えられた束の間の時間を包み込む、深く果てしない混沌の世界の感触が伝わってきます。夏休みだからこそ、こんな壮大なテーマによる長編を手にしてみたいはいかがでしょう。 一般科 柴田美由紀

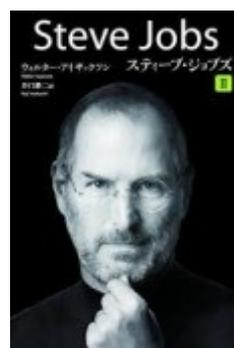
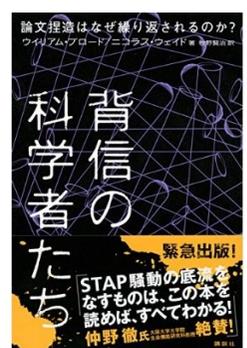
一般科国語編

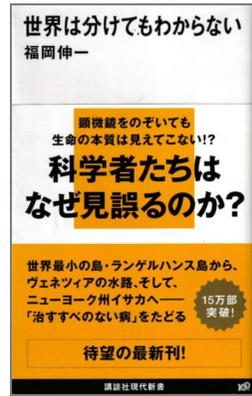
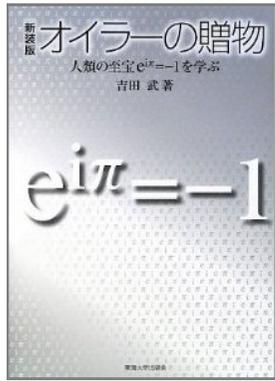
藤田博司著「魅了する無限～アキレスは本当にカメに追いついたのか～」（技術評論社 1,706円）
「無限」とはなんなのでしょうか？「無限」をどう扱うか、が数学の大きな問題意識の一つです。夏休みに、「無限」が数学でどう考察されてきたか触れてみてはいかがでしょうか。 一般科 岡田崇先生

結城浩著「数学ガール」（ソフトバンククリエイティブ 1,944円）
日本数学会出版賞を受賞した本書は、一般向けの本でありながらかなり詳しく、それでいて分かりやすく数学を展開しています。高校生の登場人物達がそれぞれの個性を發揮しながら問題を解いていく過程が面白いです。 一般科 三柴善範先生

W.ブロード・N.ウェイド著 牧野賢治訳「背信の科学者たち—論文捏造はなぜ繰り返されるのか？」（講談社 1,728円）
倫理関連の本は面白くないのが定番ですが……。この本はもしかすると例外的に面白いかも（科学者の捏造事件を面白がるのは不謹慎かもしれませんが）。 一般科 上野哲先生

ウォルター・アイザックソン著 井口耕二訳「スティーブ・ジョブズ1・2」（講談社 各1080円）
言わずとしたアップルの創業者の激動の生涯を書いたお話です。MacやiPhoneなどのアップルの製品をお使いの皆さんには特にお勧めです。 EE(D)科 南斉清巳先生





吉田武著「オイラーの贈り物」(海鳴社 3090円)

人類の至宝であるオイラーの公式を完全に理解できる一冊です。少し時間はかかるかもしれませんが、必ず理解できます。特に電気系学科の学生にお薦めです。
E E (E) 科 小林幸夫先生

遠藤諭著「新装版 計算機屋かく戦えり」(アスキー出版 2376円)

日本のコンピュータ黎明期に活躍した技術屋さんたちの計算機開発物語です。先駆者たちの熱き想いが伝わってきます。
E E (D) 科 南斉清巳先生

**ピエール=シル・ド ジェンヌ, ジャック バドス著 西成勝好・大江秀房訳
「科学は冒険!— 科学者の成功と失敗、喜びと苦しみ」(講談社ブルーバックス)**

ノーベル賞学者がソフトマターについて語る前半がとてもおもしろい。途中出てくる「ベンジャミン・フランクリンの精神」(簡易な装置で本質的な結果を得る)は、フランクリンの有名な油の膜の実験に由来します。
C 科 酒井洋先生

福岡伸一著「世界は分けてもわからない」(講談社現代新書 842円)

分子生物学を題材にしていますが、専門分野の知識がなくても十分楽しめる内容です。皆さんがこれから行うまたは行っている研究についても考えさせられることがあると思います。同じ著者の『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書、799円)もお薦めです。
C 科 渥美太郎先生



どれから読もうか、悩みますな～!

日本新聞協会編「心がぽかぽかするニュース」(エフジー武蔵 1,080円)

殺伐とした昨今、どうせニュースを読むならば、こういう時にはまさに「心がポカポカする」あたたかいニュースを読みましょう。ニュースにも関心を持ちながら、同時に心が温かくなります^^。
一般科 山西敏博先生

城山三郎著「男子の本懐」(新潮文庫 724円)

日本の経済がきわめて困難な状況にあった昭和初期の時代に、思い切った経済政策に出た浜口雄幸と井上準之助。首相の浜口は暴漢に襲われ命を落とします。国家と国民の生活のために、命がけて挑んだ2人の人生を描いた小説です。心に、静かに熱い思いが残ります。
一般科 柴田洋一先生

山際淳司著「江夏の21球」(「スローカーブを、もう一球」に所収 角川文庫 605円)

短編ですが、ギリギリの状況での心の動き、駆け引きが鮮やかに描かれています。
M 科 藤井敬士先生

**鈴木翔著「教室内カースト」(光文社新書 907円)
内藤朝雄著 「いじめの構造」(講談社現代新書 864円)**

いずれも、人間集団に対して素晴らしい分析力を発揮した本として有名です。集団の社会構造は、生物としてのヒトに根ざしているものの、文明社会においては害毒になる部分も多い。このようなヒトに埋め込まれた特性を理解して、個人個人が注意深く、より良い社会の建設に向けて1歩を踏み出す、その契機になれば望外です。
A 科 堀昭夫先生

